

# 西北アナトリア，バルケスィルにおける毛織物製造 史序説 -遊牧民の経済活動に注視して-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2021-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江川, ひかり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21836">http://hdl.handle.net/10291/21836</a>

# 西北アナトリア, バルケシルにおける アバ 毛織物製造史序説

—遊牧民の経済活動に注視して—<sup>(1)</sup>

江川 ひかり

**要旨** オスマン帝国時代, 西北アナトリアのバルケシルは, 羊毛から織るアバと呼ばれる毛織物製造がさかんな地方であった。18世紀後半, アバ製造業にかかわっていた同業者組合が二つの組合に分かれることとなった。ひとつは, アバ織物屋およびアバ仕上げ屋組合, もうひとつはアバ仕立て屋組合で, この時期に組織再編がおこなわれたと考えられる。1826年, イェニチェリ軍団の廃止に伴い, 新たな西洋式軍隊として「ムハンマド常勝軍」が創設され, 主として冬用・雨用の軍服の生地にあバが用いられることとなった。バルケシル地方は, アバ製造のアナトリアにおける一大拠点となり, アバ製造業は急速に発展し始めた。アバを製造するためには, 羊の毛を刈り取り, 毛糸を紡ぎ, 機織り機で織り, それを叩いて仕上げし, 縫製するという工程を経なければならない。その結果, アバ製造業は, 都市民, 村民と, そしてとくに原材料を生み出す羊を育てる遊牧民との連携によって支えられてきた。1853年, クリミア戦争の勃発によって, 兵士たちのとくに防寒用外套の需要が増大した。そのため, それまで在地の有力者から選出されてきたアバ製造管理者が, 中央から任命され始めた。クリミア戦争後, バルケシルは, 戦争によって生じたクリミアからのムスリム難民の定住先としても選定された。19世紀中葉の約30年の間に, バルケシルのアバ製造業も, 地方社会そのものも, 中央政府が推進する「近代化」改革およびクリミア戦争に, より直接的に結びつけられることとなった。1898年, バルケシルで大地震が発生し, 経済活動は大きな打撃を受けた。とはいえ, バルケシルでは, 今日もおアバ製造が細々とではあるが継続している。オスマン帝国における社会経済活動のみならず世界史上の国際間戦争をその末端で支えていた遊牧民の役割を, いっそう注視して掘り起こす必要がある。

**キーワード:** アバ, 毛織物, バルケシル, 遊牧民, クリミア戦争, オスマン帝国

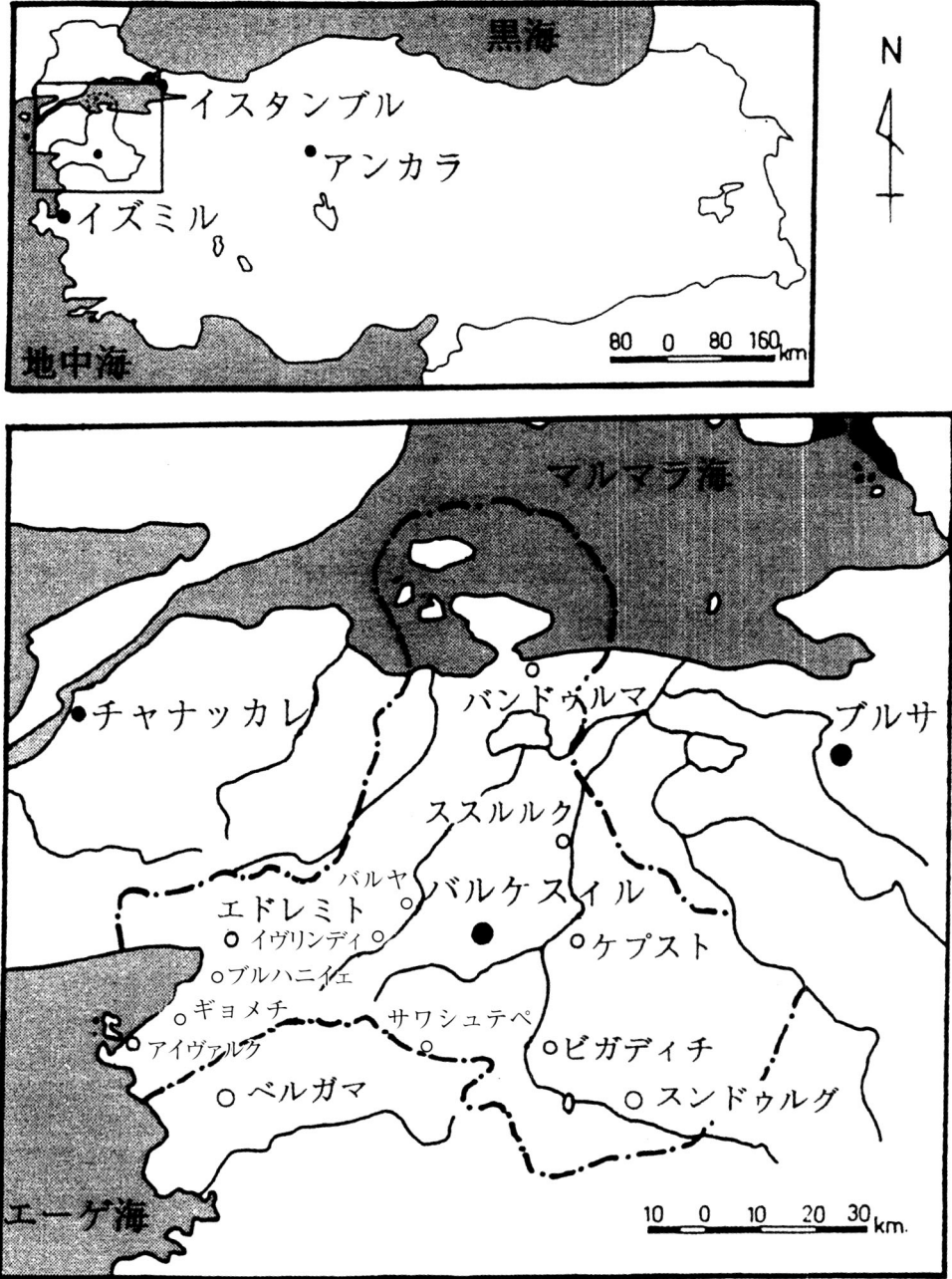
## 1. 問題の所在

オスマン帝国時代（1300頃-1922）、西北アナトリアに位置するバルケシル（Balıkesir）は、帝都イスタンブールと、絹取引の最大拠点である古都ブルサと、地中海貿易の最重要港イズミルとを結ぶ、内陸交通の要衝の町であった（地図1）。この町を中心とした今日のバルケシル県<sup>(2)</sup>一帯は、古くから皮革・繊維業、とりわけ「アバ（aba）」と呼ばれる毛織物製造がさかんな地方として知られてきた（İlgürel 1992）。このことは原材料となるヒツジ・ヤギの皮・毛が豊富に産出・確保されたことを意味している。すなわちアバ製造業の発展は、ヒツジ・ヤギを飼育しながら生業を営んできた多くの遊牧民グループに支えられていたということができよう<sup>(3)</sup>。

ヨーロッパ史上、毛織物業がフィレンツェやネーデルランドにおける14世紀ルネサンスを導いた富の源泉となったこと、さらに羊毛の輸出入および毛織物生産をめぐる競争が、18世紀産業革命にいたるまでのとりわけ西ヨーロッパ国際関係を揺り動かしたことは広く知られている<sup>(4)</sup>。これに対して、ルネサンスを支えた富裕層に珍重されたトルコ絨毯がアナトリアの遊牧民によって織られていたことは、あまり目を向けられていないのが実状である。草木や花文様を中心としたトルコ絨毯は、ルネサンスを代表するカルロ・クリヴェッリ（1430頃-1495）<sup>(5)</sup>やホルバイン父子などによって絵画に描かれた。なかでもハンス・ホルバイン（子）（1497/98-1543）は、代表作「使節たち」などにおいてトルコ絨毯をさかんに描いた画家として知られており、美術史の分野では同時代のトルコ絨毯が「ホルバインI型」などという名称で4つの型に類型化されている<sup>(6)</sup>。このように、それらの多くが現存しないにもかかわらず、今に残るルネサンス絵画に描かれた「オリエントの絨毯」から、当時の遊牧民の活動を「発見」することは可能である。

16世紀のアナトリアにおいて遊牧民は、総人口の15～20パーセントを占めていたといわれている（Barkan 1957）。1840年のバルケシル中心郡の人口が約17855人で、同郡帰属遊牧民人口の割合は16世紀におけるそれに相当する16.7パーセントを占めていた（江川 2009）。バルケシルがアバ製造拠点となるためには、原材料となる羊毛の供給者としても、さらには羊毛を紡ぐ労働者としても遊牧民の存在が不可欠であった。それにもかかわらず、バルケシルのアバ製造に関する実証的研究はほとんどなされてはこなかった。その理由の第一は、バルケシル産のアバは「幸いにも」国際市場と直結する主たる製品とはならなかったことが指摘できる。例えば、バルケシルの東南に位置するウシャクが生産の中心となった「オリエントの絨毯」は、19世紀後半にロンドン、パリ、ウィーン、フィラデルフィアなどで開催された万国博覧会に出品され、国際市場と直結した結果、ウシャクにおける絨毯生産は倍増し（Quataert 1990）、オスマン帝国の主要輸出品となった。

これに対して毛織物業は、上述したように14～17世紀を中心とした西ヨーロッパ経済を揺



地図1 現在のバルケスイル県境

\* *Balıkesir Bir Kentin Kimliği* (Ankara, 1997, s.77) に基づいて作成した江川 (1998) の地図に加筆・修正

り動かしたにもかかわらず、産業革命は毛織物業では起こらず、新興の綿織物業で起こることとなった。このことについて川北稔は、「もともと、綿織物はヨーロッパでは生産できず、東インド会社の輸入によって普及したもので、一七世紀の後半からイギリスをはじめとする西ヨーロッパ諸国で爆発的な人気を博した。理由ははっきりしないが、この時代からそれまでの分厚い織物に代わって、軽くて薄い、色鮮やかな繊維品がファッションナブルとなった。毛織物でも、厚手の旧毛織物より、薄手の新毛織物が好まれるようになった」（川北 2003 p.65）と指摘している。バルケスイル産の厚手の毛織物であるアバが発展を見る 19 世紀の西ヨーロッパでは、厚手の毛織物はすでに「旧毛織物」と化していたのである。ただし、坂本勉は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、イスタンブルおよび黒海沿岸の中継貿易の拠点であったトラブゾン経由でイランへ輸出された毛織物が増大していることを指摘している。これらの毛織物のなかでアバが占める割合は判然としないが、イランにとって「軍服やウラマーが着用する外套などの生地として使われる毛織物の需要は、絹織物よりもはるかに多く、1892 年以降は輸入貿易のなかで綿製品に次で第 2 位を占め、1904 年を過ぎると 1907 年を除いて綿製品の輸入額を抜いてトップに躍り出る」と指摘している（坂本 2015 pp.66-69）。この「軍服やウラマーが着用する外套などの生地」として使用されるという点から、「毛織物」のなかにアバが含まれている可能性は大きい。

第二として挙げられる理由は、都市史・地方史研究の対象としては、上述したようにイスタンブル、ブルサ、イズミルといった帝国内でも群を抜いた三大都市に研究が集中しており、バルケスイルはこれらを結ぶ機能を有していたとはいえ、特段、目立つことのない地味な内陸中継都市であったためである。

筆者は、これまで西北アナトリアのバルケスイル地方に関して、19 世紀を中心に、都市民、村民、遊牧民の人口および生業、とりわけ遊牧民の定住化過程に関する研究を進めてきた（江川 1997; 2006; 2009; 2010; 2011; 2014, Egawa 2004）。この過程で、バルケスイル地方におけるアバ製造に関しては、すでに 1840 年の『資産台帳』に依拠してバルケスイル都市社会史として考察をおこなった（江川 1998）。そこで本稿では、バルケスイル地方のアバ製造史の骨格を跡づけたい。とくに自らは記録を残さずかつ公文書においても記録されることが少ない遊牧民の経済活動に注視しながら解明したい。

## 2. 研究史

19 世紀前半に、バルケスイルがアバ製造拠点の一つとなったことを明らかにしたのは、オスマン経済史家キュテュクオウルである（Kütükoğlu 1981）。彼女は、1826 年のイエニチェリ軍団廃止に伴って、新たに設置された新軍団「ムハンマド常勝軍（Asâkir-i Mansûre-i Muhammediyye）」のための軍服製造に関する詳細な研究において、とくに冬の軍服の生地

として用いられたアバ製造地としてバルカンにおける複数の町とともに、アナトリアでは唯一、バルケシルが指定されたことを指摘した。同研究は、今もなお19世紀のオスマン帝国における毛織物業に関する最も重要な基礎研究に位置づけられる。

19世紀のオスマン帝国では、官営工場が基盤となってイスタンブルを中心に製造業が発展してきたことが明らかにされてきた(永田1971; Kütükoğlu 1994; Güran 1992)。その後、毛織物業も含めた手工業の歴史は、「世界システム論」と結び付けて論じられるようになった。19世紀半ば以降のオスマン帝国を「近代帝国」として捉え直すという1990年代以降の研究潮流に関しては秋葉淳によって簡潔に整理されている<sup>(7)</sup>。この中で秋葉は、オスマン帝国の労働者や国内手工業の歴史など、世界システムへの抵抗や対抗の局面に早くから注目し、90年代の研究では、変革の行為主体をオスマン帝国の側に、そして地方社会の側に見いだそうとした社会経済史家カータルトの研究を挙げている。

カータルトは、19世紀のオスマン帝国におけるマニュファクチュアの発展を、以下のよう  
に整理している。第一期(1800～1826年)は、すでにオスマンの工業製品の輸出が減少しつ  
つある時期である。ナポレオン時代が終わり、政治的安定が回復すると、東地中海地域にお  
ける英国製品の輸入がしだいに増加していった時代である。第二期(1826～1870年)は、オス  
マンの国内工業、とりわけ織物工業が壊滅的打撃を受けたが、ただし同時期、一方では新たな  
工業の萌芽もみられた時代である。そして第三期(1870～1914年)は、多くの工業部門でマニ  
ュファクチュアによる生産高が増大した時代であり、この増大は国内市場および輸出向けの双方  
に見られることを指摘した(Quataert 1994a p.889)。このようなカータルトによる時期区分は、  
ひとつの判断基準として考慮されるべきであるが、オスマン帝国全体を外観した時期区分と、  
地方社会におけるそれとは必ずしも一致するわけではなく、たとえば本論文で明らかにするよ  
うに、バルケシルのアバ製造業は、第二期に発展をとげることとなる。さらに同一地方にお  
いても各種の工業ごとに時期区分が異なることが予想される<sup>(8)</sup>。

ところでカータルトは、マニュファクチュアに関する論考において、「われわれが毛織物製  
造に関して議論する際、多くの史料は、一定の原材料、例えば染料や羊毛などの供給者として、  
その個人が町や村に定住しているということが暗黙の了解のままの状態、都市民に言及して  
いる。しかし、より綿密な考察をするなら、彼らのなかには、定住化した複数のコミュニティ  
の経済生活のなかで、商品の交換において遊牧民がきわめて重要な役割を果たしていたとい  
うことが判明するのである。遊牧民の重要性はこれまで軽んじられてきており、19世紀のマニ  
ュファクチュアを我々が理解するためにはもっと見直さなくてはならない」(Quataert 1994a  
p.932, Note 115)<sup>(9)</sup>と強く主張した。絨毯および毛織物製造に関するカータルトの初期の研究  
では、これらの製造業がいつ、どのように機械化されたか、生産された商品がいかに国際市場  
と直結していったかに焦点があてられていたが、この1994年の論考ではじめて、これらの製

造業の土台を支えていた遊牧民の存在に言及したことの意義は極めて大きかった。とはいえ、カタルト自身は2011年に早世してしまい、その後はアナトリアにおける毛織物業およびその背景にある遊牧民の活動を掘り起こす実証的研究は現れてこなかった。

例えば、ファローキーは17世紀から19世紀前半までの毛織物のマニファクチュアについて論じるなかで、現在のブルガリア諸都市およびアナトリアの中規模諸都市を取り上げているが、バルケシルは製造地としても言及されていない (Faroqhi 2006, pp.373-374)。さらに現在のブルガリアを中心とした毛織物業におけるマニファクチュアに関する研究 (Ianeva 2014) がブルガリア人研究者によっておこなわれているが、バルケシルのアバ製造は対象外のようなのである。

他方で、オスマン帝国における遊牧民に関する近年の研究動向についてはすでに諸研究 (永田 1984, 江川 2006; 2010) の中ですでに整理されてきたため割愛するが、ここで強調したいことは、遊牧民は元来、自ら記録を残さない人びとで、歴史の中で彼らがどのように生きてきたかの詳細を明らかにするためには、口伝による語り伝えや手織りの絨毯・墓標 (江川 2014) などの物質文化が史料として不可欠なことである。筆者は、1840年の『資産台帳』分析によって、バルケシルのアバ製造には遊牧民の役割が重要であることはもちろん、都市民と村民とが連携した分業体制が成り立っていたことの一部を掘り起こし、さらに、イェニチュリ軍団廃止以後に創設された新軍団用の軍服製造地としてバルケシルが指定されたことを契機としてアバ製造が発展をとげたこと、アバ製造をめぐる利権争いを展開した在地の二大地方名望家 (アーヤーン) 家系は、都市部と農村部とにバランスよく経済的基盤を築いていたことを明らかにした (江川 1998)<sup>(10)</sup>。

バルケシル地方史に関する研究動向についてもすでに整理した (江川 1998) ため割愛するが、概説史および名士録はウズンチャルシユル (Uzunçarşılı 1925; 1992) が、アバ製造の発祥に関しては、地方史家スウによる1937年の論考 (Su 1937a/1937b) が、同時代の住民から聞き取った語り伝えを書き留めている点で貴重な史料であり、アバ研究の出発点になっている。またバルケシル地方史に関してはユンリュヨルの、17・18世紀のイスラーム法廷記録に依拠したバルケシル都市社会に関する博士論文 (Ünlüyoğlu 1995) および「バルケシルにおける衣服史研究」 (Ünlüyoğlu 1998) の論考が非常に重要である。近年、アククシュ (Akkuş 2001) およびシムシル (Şimsir 2013) による地方史研究も刊行されたが、アバ製造を中心とした体系的研究ではない。

これらの研究動向を踏まえて本論文では、バルケシルにおけるアバ製造史のアウトラインをより広い視野から、中央政府による改革と地方社会との関係、さらには国際関係と地方社会との関係に着目して跡付ける。その際、アバ製造の基礎となる羊毛を生産していたにもかかわらず、公文書に記録されることが極めて少ない遊牧民の存在をつねに注視しながら考察したい。

### 3. 毛織物におけるアバ

バルケシルにおいて伝統的に製造されてきたアバと呼ばれる毛織物とは、どのような織物であろうか。

1640年のイスタンブルで流通していた代表的な毛織物に関しては、キュテュクオウルによるイスタンブルの『公定価格台帳』の研究<sup>(11)</sup>から知ることが可能である。同台帳に見られる代表的な毛織物は、ソフ (sof) とチュカ (çuka) とに大別され、アバ (aba) は国産の「厚手の毛織物」として補足的に言及されている。これらのうちソフは、アンゴラヤギ (モヘア) もしくはヤギの毛から作られる毛織物で、アンカラなどアナトリアで織られ、すべて国内産であった。チュカは、テッサロニキ産を例外として、ヨーロッパ産毛織物で、イギリス製は「ロンドン」、パリおよびフランス南部のカルカソンヌ地方製は「カルカソンヌ」、イタリアのフローレンス南部のカルカソンヌ地方製は「フローレンス」という名で呼ばれていた (Kütükoğlu 1983 ss.59-61)。

美術史家オゼンによって編まれた『トルコ語における織物の名称』(Özen 1982)でも、チュカは目が細かく頑丈な毛織物で、最も有名なチュカは現マケドニアのスコピエおよびギリシアのテッサロニキで織られ、赤色が広く受け入れられたと記されている<sup>(12)</sup>。キュテュクオウルは、いつ頃からかは明記していないが、イエニチェリたちへは一年に一度、軍服とチュカから作られた雨着が支給されていたと述べ、このチュカ織りは、15世紀末にスペインおよびポルトガルからオスマン領のエーゲ海沿岸地域およびとくにテッサロニキに避難し、定住した、スペインの毛織物技術を保持したユダヤ教徒が担っていたことに関する諸文献を紹介している (Kütükoğlu 1981 s.544)。

以上のことをまとめると、チュカの製造技術はスペインから逃れてきたユダヤ教徒難民によってオスマン帝国へ伝えられたと考えられ、ユダヤ教徒最大のコミュニティとなったテッサロニキ、そしてその後彼らの大きなコミュニティができたプロヴディフ一帯が、オスマン「国内産」チュカ製造拠点になったと考えられる。

チュカに対して、厚手の羊毛から作られたアバは国産で、原産地については諸説あるが、ブルガリアのローヴェチおよびプロヴディフ、ブルガリアと国境を接するマケドニアのストルミツァで織られており、今日のプロヴディフおよびブルガリア諸都市がアバ製造地であったが、17世紀の時点ではバルケシルの名は挙げられていない (Kütükoğlu 1983 s.61)。1640年イスタンブルで流通していたアバは、黒、白、赤、紫、淡い赤茶などの色で、一部のアバについては「教団長 (長老 şeyh) のアバの白、上質/中質」、あるいは「プロヴディフの黒いアバ」、 「ストルミツァのアバ、毛羽有り/無し」のように質や産地が明記されている製品もあるが、それらのなかにバルケシル産のアバは記されていない<sup>(13)</sup>。オゼンによる上掲論文のアバの項目では、「現代まで織られ、使用され続けてきた、厚手の羊毛製の毛織物 (kalın yünlü bir



kumaş)。この織物から一般には男性服が作られる。古くからもっとも有名なアバはバルケスイルで織られた」(Özen 1982 s.299)と定義されている(写真参照)。ここでははっきりと「厚手の」と書かれていることから、アバが17世紀後半の西ヨーロッパで、すでに「旧毛織物」といわれていた毛織物であることが理解されよう。あるいは、「アバとは古くから貧しい人びとが着用するもの」で、イスラーム神秘主義の修道者などが着るともいわれる(Uludağ 1988)。さらに17世紀においては、バルケスイル製のアバが実際に使用されていたか否かは不明だが、アバがイスタンブルの帝室造船所で働く囚人や受刑者の衣服用に生産されており(Bostan 1992 ss.250-252)、18世紀においても、アバおよびケベ(kebe)<sup>(14)</sup>という名で知られる質素な毛織物は低所得者および中流の人びとが着用し、中流および高額所得者はそれらを室内装飾品としている(Genç 1994)とも述べられている。18世紀はじめのバルケスイルのイスラーム法廷記録によれば、厚手の重いアバからは雨着が作られていた(Ünlüyol 1998)。そして今日のバルケスイルにおいても「寒い冬の時期、郊外もしくは商工業者の間でスポン(pantolon)およびチョッキ(yelek)として今も着用されている」(Şimşir 2013 s.29)(写真参照)。

以上のことから、アバとは、一般に古くから比較的中・低所得者の男性が主として防寒・雨よけのために着用してきた厚手の国産毛織物であったため、いわゆる商品価値はチュカより低かった。17・18世紀の、羊毛から作られる毛織物には、外国産のチュカと国内産のアバがあったが、すくなくとも1640年のイスタンブルの『公定価格台帳』においては、バルケスイル産のアバが確認されなかった。これらのことを踏まえた上で、筆者は、さしあたってバルケスイルにおけるアバ製造の歴史を次の5期にわけて考えており、本論文ではこれらのうちの主として第三期までを跡づけることとする。

第一期 萌芽期：アバ製造のはじまり(～1826年)

第二期 発展期：新軍用軍服製造拠点、遊牧民のゆるやかな定住(1826～1853年)

第三期 成熟期：クリミア戦争、難民の到来と遊牧民の強制的定住、大震災(1853～1898年)

第四期 復興期：震災復興から1950年代まで

第五期 継承期：1950年代から現在まで

#### 4. 第一期 萌芽期：アバ製造のはじまり(～1826年)

バルケスイルにおけるアバ製造のはじまりについては、キヤーミル・スウの論考にもっぱら依拠している。スウによれば、「バルケスイルにおけるアバ製造は、明らかに非常に古い歴史がある」にもかかわらず、同郡のイスラーム法廷記録においてアバ職人・商人に関する情報は少なく、これらのアバ業者が組織化されたのは18世紀後半であったという(Su 1937a; 1937b

s.47)。

1689/1690年の記録では、古くからバルケシル郡では、アバの購入者が一荷につき2アクチュ<sup>(15)</sup>の検印税をアバの検印職員 (damga mübaşiri) へ支払い、それ以上のものは要求されては来なかったにもかかわらず、アバ検印監督官 (damga emini) に就いた者がそれに満足せずに0.5クルシュ<sup>(16)</sup>の税を要求したので、検印監督官は、検印職員が徴収する以外、なんらの税を徴収してはならないと中央政府は命じている (Su 1937a)。すなわち、この時点では、アバの購入に際して、検印義務があり、税が課せられていたことと検印業務には検印職員が従事してきたこと、加えて検印監督官が存在していたことが理解できる。

1690/91年のイスラーム法廷記録には、バルケシルの代官が、アバ検印官職 (aba damgacılık) を得たと主張し、アバ業者から検印税を強引に徴収したこと、そのためこの事態に関して中央政府に苦情が申し立てられたことが言及されている。この申し立てに対して中央から送られた勅令 (fermân) では、バルケシルの町では古くから今日に至るまでアバ検印官はいなかったにもかかわらず、シャリーアおよび行政法に反してバルケシルの代官は「アバ検印官職を得た」と言って、多くの貧しい人びとに不安と混乱をもたらしたことは許されることではないと述べられ、代官の理不尽な行動が禁ぜられた (Su 1937a)。

このような税の不正徴収問題とは異なり、毛織物業者の組織化を示す記述がイスラーム法廷記録に現れるのは、1766/67年である。セイイド・ハジュ・アリーがアバ製造業者組合 (abacı esnâfi) の組合長 (kethüda) に任じられ、中央から認可状 (berât) を受けた。しかし、しばらくの後、同地域住民ではないハジュ・アブドゥッラーという名の人物が現れて、アリーは仕立屋 (aba terzileri) の組合長になったので、私はアバ織物屋 (top abacıları) および仕上げ屋 (dinkçiler) の組合長になったと主張して、セイイド・ハジュ・アリーとの間に係争が発生した。この問題が中央政府へ申し立てられた結果、仕立て屋組合は、別に存在してきたのであって、アバ製造においては、アバ織物屋・仕上げ屋組合と仕立て屋組合とは異なる組合であり、したがって、アバ織物屋・仕上げ屋組合長は、ハジュ・アブドゥッラーに任ぜられる、という決定が政府によって下された (Su 1937a; 1937b ss.47-50)。

ここで重要なことは、アバの製造において「仕上げ」とよばれる作業が重要な役割を果たしていることである。アバの製造方法は、次のとおりである。まず羊から毛を刈り取り、次に羊毛を撚って毛糸にした後、機織り機で織られる。織られたアバは、仕上げ屋 (dinkçi) の手に渡され、ディンキ (dink) といわれる仕上げ機で、雨を通さないようにするため叩かれ、フェルトのように圧され、目が整えられることによってはじめて「アバ」と呼ばれる織物が完成する。その後、仕上げ職人から仕立屋へ戻され、男性用ベストやスボン等に縫製されることになる。この仕上げ作業は、たんに艶を出すための作業ではない。ところが実際にはこの仕上げ作業をせず、アバを販売する者がいることが問題化したため、上述した事件の3年前の

1763/64年、アバ織物が監視のもとに仕上げ職人へ渡されることが決定されていたのであった (Su 1937b ss.48-49)。このことによって、適正な製品は屋根付き市場で売られることが決められたため、それ以外の路上等で販売されたものは、「海賊版」であることが明らかとなったのである。同時代、品質管理が徹底されていたことが理解できる。

これらの諸問題から、バルケスイルのアバ製造業において、仕上げ作業を骨抜きにした悪質なアバ製造をする者が出現していたこと、それはおそらくは製造規模および製造者人口の増加によって、製品管理の徹底とアバ製造業者組合体制の再編とが行なわれたと読み取ることができる。つまり、バルケスイルのアバ製造業史におけるひとつのターニング・ポイントが18世紀後半におとずれたことが指摘できよう。

ところで、バルケスイルにおけるアバ製造のはじまりはいつなのか。スウは、このことに関する次の2つの逸話を紹介している (Su 1937a; 1937b ss.47-51)。第一の逸話は、上述の係争事件において織物屋・仕上げ屋組合長となったハジュ・アブドゥッラーに関するもので、彼は今日もなおアバ製造業者の間で同業者の聖人として「アブドゥッラー・ババ (始祖/創業者)」と呼ばれており、民衆の間では次のように語り伝えられているという。

昔、アブドゥッラー・ババという名の一人の男が、「乙女の泉 (Kız pınarı)」<sup>(17)</sup>地区の「ハジュ夫人の貯水泉 (Hacı Hanım çeşmesi)」付近に家を建て、彼の妻および二人の子供とともにこの家に住み着いた。アブドゥッラー・ババは、家の一室でチュル (çul)<sup>(18)</sup>を織り、子供たちは、近所で二頭のヤギに草を食ませていた。織物の技の達人であったアブドゥッラー・ババは、非常に美しく、刺繍や飾り玉を付けた布袋 (heybe)<sup>(19)</sup>を織った。この技を子供達へも教えた。

ある日、自らが作った布袋やケベなどを携えて、くに<sup>(20)</sup>の外で開かれている市へ売りに行き、バルケスイルへ戻る途中、各所を歩き回り、多くのアバ製造業者と知り合って、製造技術を学んだ。自らの織り方法とそれほど違いがなかったため、非常に短期間でアバの織り方法を習得した。立ち寄った場所で織物の仕事に携わり、4、5ヶ月後、バルケスイルに戻ると、自らのチュルを織る織り機をアバ織り機に改造して、アバを織り始めた。一定期間、アバ織りに勤しんだ後、資本 (の蓄積) および事業化に成功したアブドゥッラー・ババは、自宅の横にアバ織りだけをおこなうための製造所 (imâlâthâne) を建て、そこに多くの織機を設置した。アバ製造において用いられる糸は、バルケスイルの羊毛から、人の手によって糸車 (çıkırık) で撚られたものだった。時が経つにつれて、事業は拡大し、アブドゥッラー・ババのもとで働く者は増加した。働き手の多くは婦人や娘たちであった。これらの女性たちは、毎日、朝から夕方までそこにある小川で羊毛を洗い、洗い終わった羊毛を紡いだ。それゆえに、その小川は「乙女の泉」と呼ばれるようになったという。

この逸話とは異なる第二の逸話は、次のようなものである。

バルケシルにおけるアバ製造技術は、オスマン軍がバルカン地域（Rumeli）でおこなったさまざまな戦いの際、バルカン地域からバルケシルおよびその周辺に到来した移民がもたらした。これらの移民のなかでバルヤ（Balya）郡<sup>(21)</sup>に移住した者たちは、アバ製造業、綿織物業（keytancılık）、シャヤク<sup>(22)</sup>製造業（şayakçılık）を営んでいた。バルヤの鉱山<sup>(23)</sup>で働くバルケシル出身の若者のうちの一人が、あるアバ製造業を営む者の娘と結婚した。この夫婦がアバ製造技術をバルケシルにもたらしたという。

これら二つの逸話は、スウが、1936年に高等<sup>リセ</sup>学校を卒業した男性から聞き取った語り伝えであるが、筆者は、これらの語り伝えがアバ製造業の黎明期のさまざまな手がかりを我々に提供してくれる貴重な史料であると考えている<sup>(24)</sup>。第一の逸話からは、まず、バルケシルにおいてアバ製造業者から今日も同業者の聖人とされているアブドゥッラー・ババは、もともと土着の人ではなく、アバ製造を家内製造から製造所生産へと拡大させた人物であり、上述したように同業者組合の再編において織物屋・仕上げ屋組合長になったことが理解できる。次に、当初、アブドゥッラー一家のチュル製造においては、男性であるアブドゥッラー・ババ本人が織り、妻と娘は羊毛を洗うことと糸糸を撚ることという分業体制ができていた。製造所を建てて機織り機を導入した後は、近隣の女性たちが機織りをしていたのであった。加えて、羊毛を洗うためには豊富な水が必要であるために、川や泉が大切に管理されて、貯水泉がそこで働く女性たちと結びついて神聖視されてきたことが窺われるのである。

第二の逸話からは、アバ製造技術がバルカンからの移民によって、バルヤからバルケシルへ移転された可能性を示すものである。上述したように17世紀前半には、アバ製造地がブルガリアの諸都市に広がっていたことを考慮すれば、アブドゥッラー・ババが外にかけた先がバルカン方面だった可能性もあるだろう。あるいは、バルカンからの移民によって直接、製造技術がもたらされた可能性もある。ただし、だからといってアバ製造技術がもともとバルケシルにはまったく根付いていなかったと断言することもできない。なぜならば、17世紀前半の法廷記録の中の遺産目録には、「アバ 300 クルシュ」「ケベ・アバ 200 クルシュ」「赤のチュカ 200 クルシュ」「アバ付赤のチュカ 600 クルシュ」（Gündoğdu 1992 s.43, 118）などと記されているからである<sup>(25)</sup>。したがってバルケシルにおけるアバ製造のはじまりがいつかということを確認することはできないが、語り伝えられてきた二つの逸話から、バルケシルにおけるアバ製造技術は、外からもたらされた可能性もあると推察される。

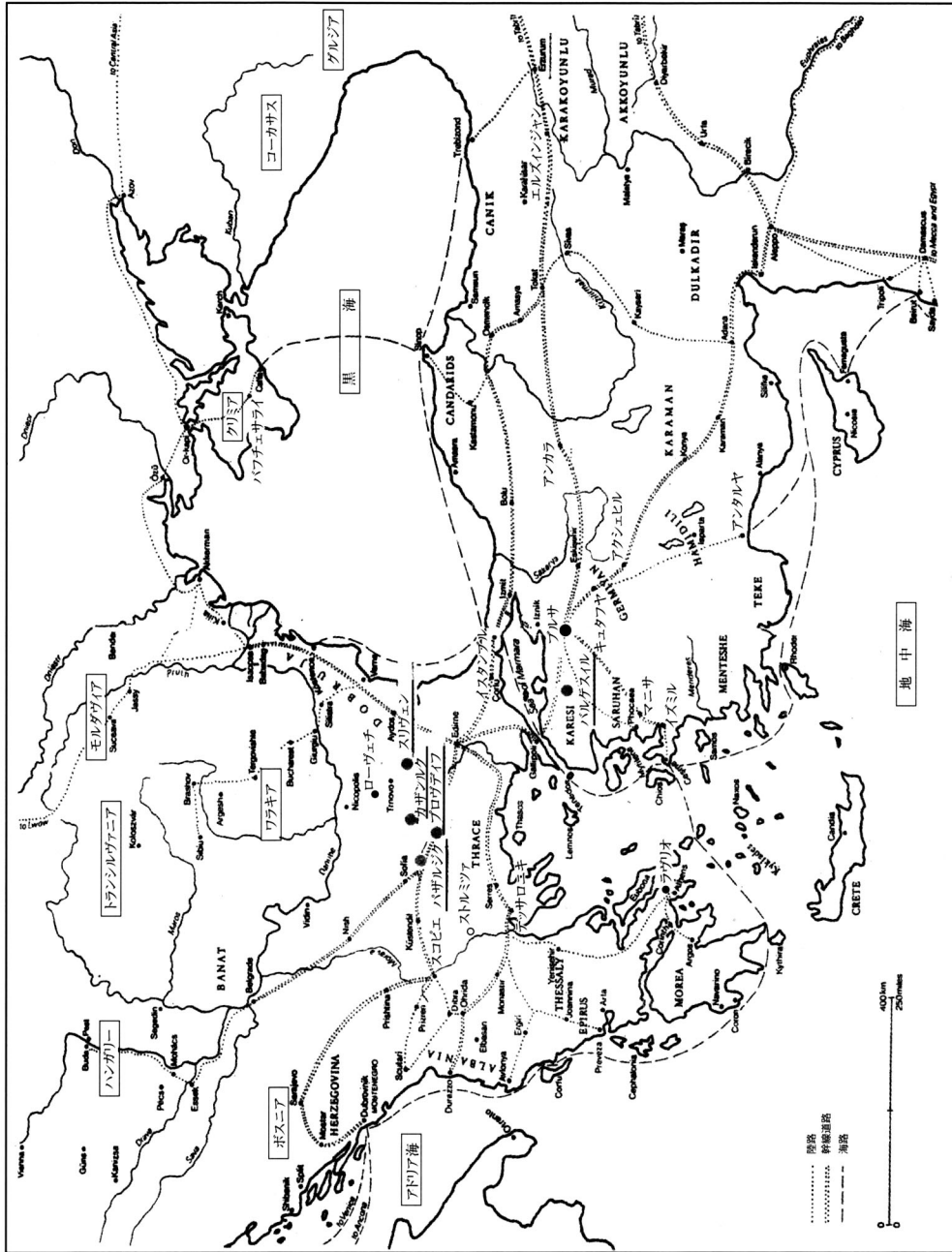
## 5. 第二期 発展期：新軍用軍服製造拠点，遊牧民のゆるやかな定住 (1826～1853年)

第二期は、イエニチェリ軍団が廃止され、西洋式軍隊である「ムハンマド常勝軍 (Asâkir-i Mansûre-i Muahammediyye)」が創設された1826年からクリミア戦争開始直前までの時期で、アバ製造業発展期といえる。帝国の伝統的近衛歩兵軍団であったイエニチェリ軍団は、火器の流布などによってその重要性が低下し、19世紀初頭には、軍隊としてはすでにその役割を果たしていなかった(秋葉 2009)。地方社会に権力基盤を築いてきた地方名望家系<sup>ア</sup>の権力を削ぎ、中央集権化政策(永田 1969)を推進するスルタン、マフムト二世(在位 1808-1839)は1826年、この有名無実化していたイエニチェリ軍団を公的に廃止し、新たに西洋式軍隊「ムハンマド常勝軍」を創設した。創設時、同軍隊は、1526名が1部隊からなる8部隊、合計12,208人から編制された(Kütükoğlu 1981 s.519)

1826年7月以降、この新軍団に、そして他の軍団にも続いて洋装の軍服が採用され始めた。新軍服は、夏服と冬服との二種類が支給されることとなり、冬服用にはチュカ、アバ、シャヤクの毛織物が用いられることとなった。将校クラスには質の高い外国産チュカから、兵卒には国産のアバおよびシャヤクから軍服が縫製されることが決められた(Kütükoğlu 1981 ss.544-545)、とくに冬用の軍服にアバが用いられたことから、バルケスイル地方は、新軍服用アバ製造の拠点のひとつとして「近代殖産興業」に組み込まれることとなった。この新軍服に関する研究をおこなったキュテュクオウルによれば、1827年における新軍服用アバ製造地は、ブルガリアのプロヴディフ、スリヴェン、カザンルク、パザルジクとアナトリアのバルケスイルであった(地図2参照)。これらの各拠点において、毎年、何反<sup>トフ</sup>(<sup>26</sup>)のアバを製造するかに関する生産計画がたてられた(Kütükoğlu 1981 s.550)。

新軍服製造拠点に指定されたことを契機としてバルケスイルにおけるアバ製造は、1830年代に急速に発展していった。例えば、雨着用のアバ生産は、スリヴェンとカザンルクは1832年には3万反<sup>トフ</sup>ずつ合わせて6万反<sup>トフ</sup>に対して1835年には8万反<sup>トフ</sup>へ、パザルジクは1834年が3万反<sup>トフ</sup>に対して1835年には7万反<sup>トフ</sup>へと増加している。1832年のバルケスイルに割り当てられた雨着用のアバは7万5千反<sup>トフ</sup>で、全体の3分の1以上に及んでいた(Kütükoğlu 1981 s.551)。

アバ製造が周辺各地へ与えた影響を示すのは、1832年と1838年バルケスイルで製造が計画されたアバに必要な7万5千反<sup>トフ</sup>分の毛糸25万クイイエの調達先のリストである。バルケスイル県はもとより、アクシェヒル県、アイドゥン県、ビガ県、デニズリ郡、エドレミトおよびケメル・エドレミト郡、エスキシェヒル県、ブルサ県、アフヨン・カラヒサル県、コジャエリ県、キュタフヤ県、マニサ県、スーラ県などの周辺全10県および近隣の2郡にも原料となる羊毛が割り当てられたことが知られている(地図3参照)。これらの郡県と並んで唯一記録された



地図2 オスマン帝国の交易路  
 \* Halil Inalcik, *The Ottoman Empire: The Classical Age 1300-1600*, 1989 (1st ed. 1973), New York, pp.123-124 の地図をもとに作成

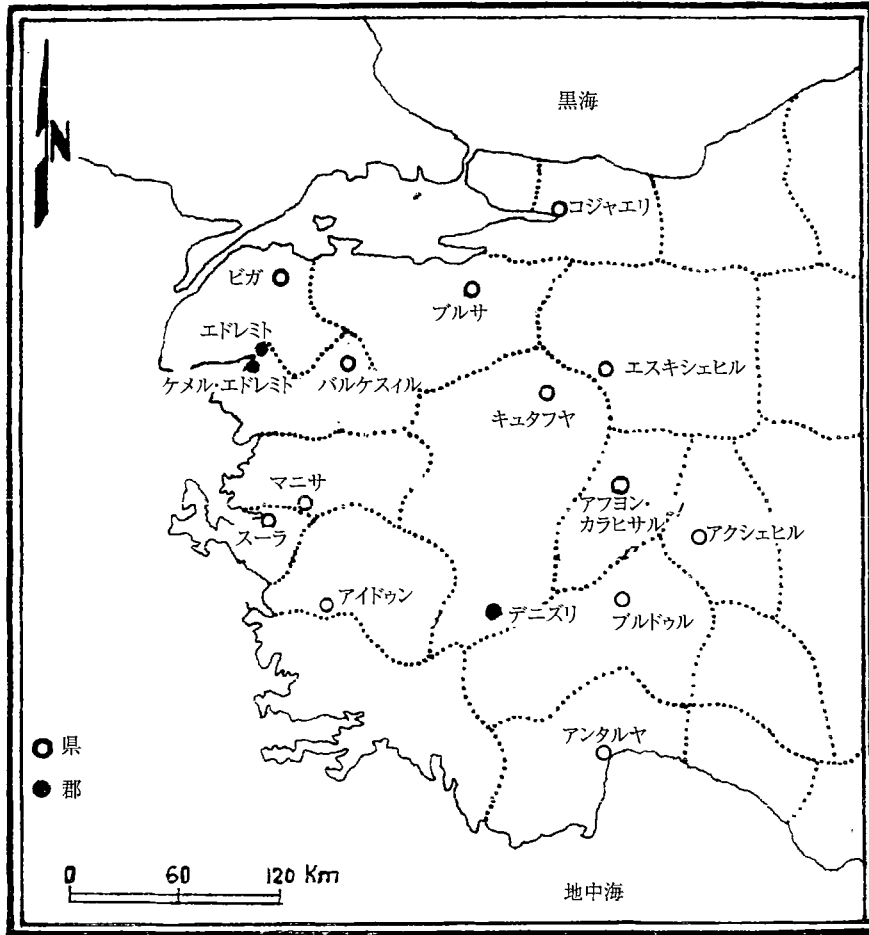
遊牧民集団の名は、ギュンデュズリュ (Gündüzlü Aşireti)<sup>(27)</sup>であった。

テュルクアイによれば、ギュンデュズリュはアナトリアの非常に広い範囲に定住したグループで、バルケシル周辺では、アイドゥン、キュタフヤ、マニサ、ブルサ、コジャエリ諸県に広がっていた。当時のギュンデュズリュの人口はさだかではないが<sup>(28)</sup>、上述の原材料の羊毛を割り当てられた諸県とギュンデュズリュの定住地とが重なっていることを考えれば、羊毛を供給する遊牧民として選ばれたグループであったと推察される。とはいえ、もちろんギュンデュズリュだけが遊牧民として羊毛供給にアバ製造業にかかわっていたことを意味してはいない。上述したようにバルケシル周辺諸郡には、1840年の『資産台帳』では、27の遊牧民グループ、少なくとも約9千人が生活していた。これらのグループをはじめ、周辺地域の遊牧民が飼育する羊の羊毛こそが、生産割り当てを支えていたことは明らかである。

移動生活を営む遊牧民集団がどこで夏営地を構えているのかをバルケシルのアバ製造監督官はしっかりと把握し、彼らから羊毛を確実に調達しなければならなかった。つまり、県や郡という地域からのみならず、移動する遊牧民集団から羊毛あるいはアバを運搬するためにも、地図2に示されたように西北アナトリア地域の中心に位置し、イズミルへもイスタンブルへも近接しているという地理的条件ゆえに、バルケシルがアバ製造の拠点になりえたといえるだろう。

ところで、かつてバルケシルの代官職を務めたため、アバ製造にも精通しているという理解からアバ製造監督官に任じられた「県知事 (kaymakam)」<sup>(29)</sup>のシェリフ・アガは1843年、遊牧民担当役と共謀して不正収入を得ようと道をふみはずした。すなわち、シェリフ・アガは質の悪いアバー反<sup>トフ</sup>に高値 (43クルシュ14パラ)<sup>(30)</sup>をつけて利益を着服するという事件が発覚した。このことを受けて中央から調査のために千人隊長アフメド・エフェンディが派遣され、当地に蟄居している門衛長官待遇のギリディー・ザーデ・メフメト・ベイと面会したところ、高質かつ安価な (38クルシュ) アバが入手できることを知った。その結果、シェリフ・アガは解任され、ギリディー・ザーデ・メフメト・ベイが「県知事職」に就くとともに、アバ製造監督者を任せられることとなった (Kütükoğlu 1981 ss.552-553)<sup>(31)</sup>。

ビガディチ郡出身家系のシェリフ・アガは、1840年の『資産台帳』において、門衛長官官職待遇の「前代官」と記され、都市民の中で資産総額第一位だった家系の人物である。そして、彼にかわって「県知事職」に就任したギリディー・ザーデ・メフメト・ベイは、エジプト軍との戦いで敗退した結果、1833年にスイリストレ県知事職を解任され、10年間エディルネへ左遷されていた。これら二人は、バルケシル地方におけるかつての地方名望家系出身であり、都市部および農村部双方に経済的基盤をもつ二人の有力者が急発展を遂げる地元のアバ製造をめぐる権力争いを展開していたことを指摘した (江川 1998; Egawa 2004)。あるいはメフメト・ベイは、バルカンにおける繊維工業の拠点であったエディルネに左遷された10年の間に、



地図3 バルケシルへ毛糸を提供する県・郡

\* Kütükoğlu 1981 s.555 の地図をもとに作成



エディルネにおいて毛織物関係者と人脈を築いていたことも推察される。これら二つの在地家系は、バルケスイル地方社会においてもっとも重要な利権となったアバ製造監督者の地位をめぐる、その後もしのぎを削ることとなる。このように1840年代には「県知事職」およびアバ製造監督者の地位を巡って対立した両家系は、1850年代にはそれぞれ正規の県知事職に就いている。このことから、再三、不正が発覚し、有罪となって解職されても、「アバ製造を知る者が県知事職に就く」として、地方社会に政治的・経済的影響力を持ち続ける、旧地方名望家家系の姿が浮上してくる。

筆者が1840年の『資産台帳』に依拠してすでに明らかにしたように、アバ製造に関わる人びととしては、アバ織物屋・仕上げ屋・仕立て屋、皮なめし職人、肉屋などの職業が確認される。加えて、アバ仕上げ機を資産として所有している者は、都市では生葉商および軍人が、村民としては、バルケスイル中心町から南へ約10キロメートル離れたタシュキョイ村で18世帯中5人が存在していた。このことは、羊毛供給者の遊牧民と、都市民および村民との連携によってアバの安定生産・供給が可能であることを物語っている。

では、バルケスイルのアバ製造業における機械化はいつのことであろうか。イスタンブルおよび他の地方でも官営工場が建設されていった19世紀中葉、バルケスイルでも、1840年代にはアバの倉庫の機能も兼ねたアバ取引所 (abahânî) が存在している。すくなくとも1843年3月から、クルドnl (Kıldonlu) という名の遊牧民グループと彼らにしたがう遊牧民グループが、アバ取引所に収めるための毛糸の紡ぎ手として働くために定住したことが確認できる<sup>(32)</sup>。クルドnlは、1825/26年には、ヤージュ・ベディルやカラケチリらとともにブルサ州に帰属しており (Su 1938 ss.141-143)、バルケスイルおよびブルサ諸県に定住した遊牧民であり、それ以外の定住地は記されていない (Türkay 2001 s.441)。筆者が解説した1840年の『資産台帳』における周辺5郡に帰属する遊牧民グループの中に、クルドnlは見られなかった (江川 2014)。同台帳が網羅していなかったバルケスイル県南部地域をも含めた1842年の文書にはバルケスイル郡に納税単位として21世帯が確認され、1845年には23世帯が確認されており、彼らはチュナル・デレと呼ばれる、今日のバルケスイル郡の南にあるサワァシュテペ郡内の一村に帰属していたという (Akkuş 2001 ss.134-135, 141)。さらに1842年にバルケスイル郡を中心とする周辺諸郡に帰属していたクルドnlの納税世帯は合計928で、1842年に記録された遊牧民26グループのうちでもっとも世帯数が多かった。とくにブルハニエ郡に274、イヴリンディに261、ギョメチに160世帯が登録されていることから、彼らは、バルケスイルの中心都市に比較的近い場所に南部に定住した、人口も多い遊牧民グループであることが理解できる (Akkuş 2001 s.147)<sup>(33)</sup>。

カータルトは、クルドnlが、当該地域における他の人びとから羊毛を購入し、それを毛糸に紡いで、毛糸の重さを単位とし定価で収入を得ていたと述べ、「一般的にあって、遊牧民と

定住民との間に親密かつ複合的な経済関係が存在していたといえる」と、アバ製造業における遊牧民の役割を強調した (Quataert 1994a p.932 not. 115)。

さらに6章で述べるが、1848年ごろバルケシル中心町の郊外に、政府主導でアバ製造所の建設が開始されたことが確認されている (İlgürel 2011)。この製造所と同一の建物・敷地であるかどうか定かではできないが、同年の1848年には、バルケシルにアバ用糸紡ぎ工場 (aba ipliği imâl edecek fabrika) を設立する計画がされていた<sup>(34)</sup>。この工場建設のために必要な道具や資材、機械、糸繰り機 (çark) をフランスへ注文したことができる限り迅速になされることが、政府にとって有益であろうと申し入れられた。政府は、オスマン臣民であるドブリ・カルファの監督によって建設される工場用資金535,000クルシュなどを予算化した。とはいえ、この糸繰り工場計画は、1848年においてもまだ備品に不備があったということである<sup>(35)</sup>。

このように、アバ取引所あるいはアバ用糸紡ぎ工場等に関する情報は断片的であり、段階では確実なことはいえないが、貨幣経済の浸透著しいバルケシルの町周辺で遊牧生活をしているグループのなかには、アバの原材料である羊の飼育により特化するグループもあれば、家畜を売り払い、糸紡ぎという自らにとっても馴染み深い仕事によって賃金労働者となる、すなわち定住を選択する者もでてきたであろうと推察される。後者は、タンズイマート改革の一貫として定住化を加速させつつあった政府の方針と合致しており、アバ製造に寄与する労働者の確保のために、政府が免税措置を講じることによって、1840年代に遊牧民の定住化が推し進められたと推察される。

## 6. 第三期 成熟期:クリミア戦争, 難民の到来と遊牧民の強制的定住, 大震災 (1853 ~ 1898年)

第三期は、クリミア戦争、そして戦争終結後にクリミア半島からのムスリム難民の移住があり、同時に1863/64年、中央政府からアナトリア西部の視察官として派遣されたアフメト・ヴェフィク・パシャによって、現在も語り伝えられている遊牧民に対する強制的定住化政策 (江川2006; 2010, Egawa & Şahin 2007) が実施された時期である。

1853年にクリミア戦争が勃発して、クリミアへ従軍する軍人を寒さから守る外套用アバの需要が増大した。そのため、アバ製品の値上げ問題など、アバ製造関係者による利権争いが顕在化した。上述したように1830年代に罷免されたシェリフ・アガが1854年8月には、軍隊のアバ製造に尽力した結果、カレスィ県知事に就任している<sup>(36)</sup>。ところが一年あまりの後、1855年10月には、シェリフ・パシャ (県知事職となり、アガからパシャの称号を得る) の代わりに、帝質鉞物旧監督官のムスタファ・パシャがバルケシル県知事に就任し、アバ製造監督者も担うこととなった<sup>(37)</sup>。その後の県知事職は、多くはアバ製造責任者を兼ねることとなり、1, 2年の任期で頻繁に交代していく。それだけに、操業や利権、品質管理、価格などに問題が生

じやすかったと推察される。

クリミア戦争期には、クリミア半島のセヴァストポールにいる軍隊が寒さから身を守るための毛織物外套（*hirka*）およびアバの製造が希望されている<sup>(38)</sup>。オスマン軍人用のみならず、イギリス軍人も防寒外套用のアバも必要とされていた<sup>(39)</sup>。実際に彼らがバルケスイル産のアバ外套の袖を通したか否かに関しては不明だが、その後、オスマン帝国の英仏への経済的従属化を決定づけた一大転機となったクリミア戦争が、地方都市バルケスイルの住民に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

アバ生産の増大によって、一方で、都市民・村民・遊牧民は帝国経済へより直接的にまきこまれていき、地方官吏やアバ製造責任者などの間では利権争いが顕在化した。他方で、政府は高額な利益が見込まれるバルケスイルにアバ用毛糸繰り工場建設計画を支援し、資金提供をしたが事業は滞っていた。さらにクリミア戦争による戦費支出、さらに1854年の外債導入という財政危機に瀕した政府は1855年、鉾山開発管理も視野にいれてか、従来の地方名望家系出身者ではない、旧帝室鉾山省監督官だった官吏を県知事に任命し、バルケスイルのアバ製造業をより直接的に統制する政策に転じたのではないだろうか。

クリミア戦争の終結によって一時的なアバの需要増加は収まったが、クリミアから逃れてきたムスリム難民がバルケスイルを定住地として到来した<sup>(40)</sup>。1860年5月2日の記録によれば、ノガイ人<sup>(41)</sup>、54世帯260名が、バルケスイルに移送された最初のグループであったという（İlgürel 2011）。さらに1861年3月に召集されたバルケスイル地方会議においては、次のようなことが審議された。クリミアからの難民が、定住先を求めているため、13年前にバルケスイル町の郊外にアバ製造業者用施設の建設が政府によって開始されたが結局、完成しなかった建物を、難民の定住先として提供することになったことに疑いはないとイルギュレルは指摘している（İlgürel 2011）<sup>(42)</sup>。5章で言及したようにヒジュラ暦換算で「13年前」といえば1264年、クリミア戦争以前の1843年のことである。ここで言及されているアバ製造業者用施設の所在地も、未完成に終わった理由も、現段階では把握できていないが、皮肉にもクリミアからの難民の到来によって、同施設が「13年後」に活用されることになったのである。

アブデュルハミト二世（在位1876-1909）は、専制政治、言論統制、イスラーム主義にのっとったスルタンといわれてきたが、近年は、1875年に国家財政が破たんした直後の財政難の時代に、オスマン帝国内で殖産興業を奨励し、外圧に対抗したとの評価もなされている。この時期は、アバ工場（*Aba fabrikası*）が南東部の大都市ヴァンや東部の大都市エルズインジャンなど、アナトリアの各地で操業していることが確認されている（Kütükoğlu 1994）。

これに対して、1887/88年のバルケスイルの『カレスィ県年鑑』においては、「バルケスイルの生産物ではメロンが、製造品としてはアバが有名である」という一言のみが確認される<sup>(43)</sup>。他方で、鉾山開発に目をむけると、すでに述べたバルヤを含めてバルケスイル県内の22カ所

で操業中であり、それらの採掘権所有者のうちムスリムの名をもつものは一名である。もちろんこのことは残りの21件すべてが外資であることを意味していない。たとえば、アゴプ・エフェンディは、アルメニア系オスマン臣民と思われる。21件の採掘権所有者のうち、第4章で言及したバルヤで操業していた銀入り鉛の採掘権所有者は、ギリシアの港町の名であるラヴリオ<sup>(44)</sup>社(Lavriom Kumpanyasi)で、バルヤの他に1カ所で銀入り鉛を採掘している。もう一つは、アンチモンを採掘する、明らかに外資と考えられるムシュ・ライザル(Mösyö Rayzar)氏で、彼は、その他にバルケシル県内で8件、合計9つの鉱山で、銀入り鉛、銅、アンチモンを採掘していた。このように、鉱山開発においては、1880年代後半になると、かなりの規模で外資の波が押し寄せてきていることが理解されよう(Eren 1995, ss.37-38; Mutaf 1995, ss.163-164)。

1898年1月29日<sup>(45)</sup>15時30分にバルケシルで推定マグニチュード7.0の大地震が発生した。当時の県知事オメル・アリー・ベイから大宰相府への報告によれば、はじめの地震から3.4分後に2回目の揺れがあり、4回目の揺れがもっともひどかったという。バルケシル中心部では、50%の家屋・建物が全壊し、残った建物にも大きく損傷していた。当時のバルケシル中心町はクリミアなどからの難民も含めて4000世帯がおり、公的記録によれば、34人死亡、138人が負傷した。加えて、中心部に属す村むらにおいては、14人が死亡、20人が負傷したという。むろん、当時の県知事オメル・アリー・ベイの尽力で、倒壊したバルケシルのシンボルである時計台も再建され、復興は迅速に進んだが、アバ製造業の歴史はいったん休止されたと推察される。この年がバルケシルの再生年ともいわれている。

その後、管見の限り、近隣のイズミルおよびイズミトのアバ工場が、バルケシルにとって替わっていったと推察される。そして、イズミトのアバ工場が、外国人資本家の手中に入るとは、住民にとって悪しき影響を与えるために、売却されない決定が下されたのは、1910年のことである。バルケシルは、大震災によって大きな被害を被ったが、このことこそがアバ製造が外国人資本家の手に渡ることを必然的に阻止することにもなったのである。この点に關していえば、大震災こそが、バルケシルのアバ製造業を守ったともいえるだろう。

## 7. 結論と今後の展望

以上、述べてきたように、本稿ではバルケシルの伝統産業であるアバ製造業史の大きな流れを跡づけた。アバ製造業は、18世紀後半に同業者組合の再編がおこなわれ、1826年以降は新軍団用軍服の製造拠点となり、アバの需要が拡大した。1853年に勃発したクリミア戦争でアバ製造の需要がいっそう高まることによって、加えて戦争後に発生した難民の定住地としてバルケシル地方が指定されたことによって、19世紀のバルケシル地方の社会・経済活動は、中央政策とのみならず、クリミア戦争という国際問題とも直結したのである。

当初は、在地の旧地方名望家系が、アバ製造を統括していたが、1853年に勃発したクリミア戦争でアバ製造の需要も高まることによって、バルケスイルにおけるアバ製造の責任者は、在地名望家系の手から一端手放され、中央官僚によって担われることとなった。

タンズイマート改革における諸改革のひとつとして、政府は遊牧民の定住化を当初から掲げ、1860年代にこの政策を強化させ、南東アナトリアのアダナ地方や西アナトリア各地で強制的定住化政策が実施された。19世紀前半から中葉にかけて、アバ産業の発展が確認されたバルケスイルでは、1840年代から遊牧民が糸紡ぎ人としてアバ製造に従事していた。さらに1860年代には遊牧民への強制的定住化政策が実施され、この時期に定住化した遊牧民も、賃金労働者として糸紡ぎの職を求めた者もいたであろう。

上述したバルケスイルアバ製造史のはじまりに関する語り伝えを書き残したスウは、共和国建国後の1927年、「バルケスイルにおけるアバ製造は、もはや消滅してしまったと言ってもよいほど、今や風前の灯である」と述べている。1938年の段階で、バルケスイル県における工場・製造所リストにおいて、皮革工場86件、ゴマ・けし搾油工場79件、オリーブ搾油工場76件などが確認されるのに対して、アバ製造工場の記載はなく、唯一の痕跡として毛糸工場が1件確認されるのみである（15 *Bahkesir*）。このような状況であったアバ製造であるが、1840年には、住民18世帯中5人がアバ仕上げ機を所有していたタシュキョイ村では、1950年代を境にアバ製造はおこなわれなくなったと、同村民から筆者は直接うかがった。つまり、彼らは1950年代まで、アバ仕上げ作業を継続してきたのであった。

アバ製造は2015年2月においても消滅してはおらず、バルケスイルの町の中心部に工房も兼ねた店舗が一件存在している（写真4）。このことは、近郊の農牧業を営み、羊毛を刈り、糸を紡ぎ、織り、仕上げる農民・村民、あるいは都市民が存在していることを物語っている。

バルケスイルにおけるアバ製造の歴史から、多くのことを学びとることが可能である。第一に、国際市場に巻き込まれなかったことによって、地方社会に細々とではあるが、旧来の技術が保持され、地方社会の地場産業として長期にわたって生き続けたことである。第二に、オスマン帝国の礎を築き、その後も帝国の社会経済活動を支えてきた遊牧民は「近代」にはいり、さらに定住を強られるようになるが、バルケスイル地方の遊牧民は、都市民・村民とともに絨毯およびアバ製造業の担い手として、帝国経済を末端で支え続けたことである。第三に、アバ製造過程はかならず、羊毛の剪毛、糸紡ぎ、機織り、仕上げ、縫製という過程を経るため、技術さえ伝授されれば、家内製造でも、また村民と都市民との連携による広域で分業体制でも可能であった。そのため、バルケスイルは1898年に大地震に見舞われたが、生産ラインが一局集中ではなかったことは、突然の災害によって生産拠点をすべて失うという危険が回避された可能性もある。

本稿では、バルケスイルにおけるアバ製造発展史の概略と要点とを整理したにすぎず、生産

量の推移や製造工場の詳細に関しては未解明のままである。とはいえ、一地方社会の伝統産業に着目することによって、同地方の遊牧民の生活と、政府が推進する「近代化」改革と、そして国際間に発生したクリミア戦争とが密接に関わっているという世界史の一端が明らかにされた。史料には語られることの少ない遊牧民に関する情報も、イスラーム法廷記録をはじめ公文書史料を丹念に解読し、彼らの経済活動を掘り起こさなければならない。

注

- (1) 本論文は、2015年度駿台史学会共通テーマ「マイノリティと「近代」」における個人報告「遊牧民と「近代」—19世紀オスマン帝国，西北アナトリアにおける遊牧民と毛織物産業—」（2015年12月5日）および2016年10月にトルコ共和国トラブゾンで開催されたCIÉPO-22 Panel title: Nomads Master of Natural Life and Productionにおける英文報告“The Economic Activities of the Nomads as the Spinner: from the point of the production of the carpet and the Aba (wool textile) in Bahkesir”（2016年10月5日）を基礎に加筆・修正したものである。なお、本研究は、2014年度明治大学在外研究の成果の一部である。
- (2) 今日のバルケシル県は、オスマン時代には「カレスイ県」と呼ばれ、ときには東北に隣接するブルサ州に帰属し、ときには南に隣接するマニサと合併するなど、県境および地方行政単位が頻繁に改編された。本稿では煩雑さを避けるため、ブルサ県、マニサ県などととも現代の名称であるバルケシル県と表記する。
- (3) イスタンブルの首相府オスマン古文書館所蔵のオスマン公文書類に依拠したテュルクアイの研究によれば、オスマン帝国で確認された遊牧民グループ数は7230（Türkyay 2001 s.25）で、実際には1万グループに上るともいわれる。
- (4) 13、14世紀までのイギリスは、先進的なフランドル地方などに羊毛を供給する原料輸出国であったが、15世紀のうちに未仕上げ・未染色品ではあるが、毛織物を大領に輸出するようになっていた。たとえば、1350年代前半と16世紀初頭とを比べると、羊毛輸出は4分の1に激減する一方、毛織物輸出は40倍近くに激増している。そして16世紀前半のうちに未完成毛織物の輸出は2.7倍近くにまで急成長したため、農村では羊毛生産を目的とする囲い込みが急速に展開されたという（川北 2003 pp.8-10）。17世紀になると、オランダが、ヨーロッパの先端技術国になり、とくに繊維産業では他の追随を許さない、圧倒的な技術力を誇り、ライデンは薄く上質な「新毛織物」の製造拠点として、ヨーロッパ中にその名を知られたという（大久保 1997 p.304）。他方、イギリスは、18世紀末以降オーストラリアにおいて本格的に入植を開始し、1850年においてイギリスが輸入した羊毛の4割強はオーストラリア産であった（福井 1998 p.15）。
- (5) イタリアのルネサンス初期の画家であるカルロ・クリヴェッリ Carlo Crivelli の「受胎告知 Annunciation」（1482-86；ロンドン，ナショナルギャラリー）では、孔雀の横に置かれた白い鉢植の下と左奥のバルコニーの手すりに幾何学文様の絨毯が掛けられている（Aslanapa 1988 pp.58, 95-98）。
- (6) 永田 1998 pp.185-187. 例えば、ハンス・ホルバイン Hans Holbein の「商人ゲオルグ・ギーゼの肖像画 Portrait of the Merchant Georg Gisze (1532; ベルリン美術館)」でテーブルクロスとして描かれた絨毯は、絨毯の外側に柵文様が織られた「ホルバイン I 型」である。ホルバイン作品で最も有名な「使節たち The Ambassadors (1533; ロンドン，ナショナルギャラリー)」で、やはりテーブルクロスとして描かれた絨毯は、同一の大きな四角のモチーフが2～4つほど織りこまれたもので「ホルバイン III 型」に類別されている（Aslanapa 1988 pp.61-101）。
- (7) このような「近代帝国」論は、同時代のロシア、オーストリア＝ハンガリー、日本などとも比較可能な問題視角であると秋葉は指摘している（秋葉 2005）。
- (8) 20世紀初頭イスタンブールにおける近代的消費者の創出という視点にたったグローバル化とローカル化

- の議論に関しては、ゴードン (2013) の議論とともに、江川 (2015 pp.322-326) で述べている。
- (9) カータルトによる 1994 年以前のマニファクチュア研究としては (1992), 絹織物業については (1993), 絨毯製造については (1990) (1993) (1994b) などがある。
  - (10) なお、バルケスイル史に関してもっとも多くのご教示をいただいたのは、マルマラ大学名誉教授ミジュテバ・イルギュレル氏および、1990 年代にバルケスイル大学ネジャーティベイ教育学部講師であったアイヌル・ユンリュオル氏である。
  - (11) Kütükoğlu 1983. オスマン帝国において、価格の安定と物資の枯渇防止のために、民衆の利益を保護するものとして重視され、支配者が積極的に行なうべき職務のひとつとして位置づけられていた公定価格制度に関しては、澤井 (2002) を参照されたい。
  - (12) ペルシア語起源のチュカは、現代では一般にチュハ (çuha) と呼ばれるが、本稿ではチュカに統一する。オゼンによれば、チュカはとくに男性用衣服に用いられた (Özen 1982 s.309)。
  - (13) Kütükoğlu 1983 ss.168-170. 同書の中で、バルケスイルにおける 1630 年から 1632 年にかけての「公定価格表」も明らかにされているが、タバコや食料品に限られており、繊維製品に関する記載はない (*Ibid.*, ss.27-28)。
  - (14) ケベは、もっとも厚手のケチェ (keçe) と呼ばれる不織布 (フェルト) の名である。羊飼いが着用する長いマント (kepenek) はケベから作られる (Özen 1982)。たけの短い長袖のボレロのようなジャケットを指すこともある。また黒色のアバをケベと呼ぶこともあり (Uludağ 1998), 地方によって意味が異なることもあるため注意を要する。
  - (15) アクチェ (akçe) はオスマン朝の銀貨の貨幣単位で、ヨーロッパではアスペル銀貨の名で知られる。公的には、オスマン帝国初期から 1690 年まで適用された。
  - (16) クルシュ (kuruş) は、1690 年、アクチェにとつかわる新銀貨として市場に投入された。「25.6 グラムの重さを持ち、16 グラムの銀を含有する大型硬貨は、それまでの各種の外国通貨に代わり、オスマン市場の基本通貨の役割を果たした (林 2008 p.272)」。そのため、1689/90 年の記録は、まさに通貨変更の過渡期であったため、アクチェおよびクルシュ両単位が併用されていたことがわかる。
  - (17) スウが聞き取りをした 1937 年当時は、「カズ・ブナル (Kaz pınarı ガチヨウの泉)」と呼ばれていた。
  - (18) 毛から作られる厚い織物の一種 (Özen 1982 s.310)。
  - (19) 布袋は、馬の鞍のように背の部分に掛けて、両脇が袋状になっている厚手の布袋。振り分け荷物のように利用できる。
  - (20) memleket は今日は「国」の意味だが、ある者の国内における出身地を示す場合にも用いるため、ここでの文脈においてはバルケスイル県外と考えられ、この時代の話しとして考えれば、行き先はイスタンブール、イズミルあたりのことではないかと推察される。さらに現在のブルガリア地域としても可能性としてはあるであろう。
  - (21) 現在のバルケスイル県バルヤ郡 (地図 1 参照)。
  - (22) シャヤクは、今日ではアバとともに併記ないしは同義で呼ばれる場合があるが、18 世紀以降に製造されるようになったより質の高い毛織物であると説明されている (Faroqi 2006 p.386) ように、アバに対して新しい、高品質の位置づけがなされた毛織物と考えられる。シャヤクはチュカより目が緩く、綾織りで織られた梳毛織物である (Özen 1982 s.335)。
  - (23) イルギュレルによれば、17・18 世紀のバルヤでは、銀入り鉛から銀を抽出してイスタンブールの帝室造幣局へ送られ、残った鉛は、砲丸に铸造されていたという (İlgürel 1992)。すなわちバルヤでは銀入り鉛の採掘をおこなっていたため、バルケスイルや近隣から鉱山労働者が集まっていたと推察される。バルケスイルで編まれた共和国建国 15 周年の共和人民党記念誌 (*15 Balıkesir*, 発行年無記載, 1928 年以降) に掲載された写真から、当時もバルヤに鉱物の浮遊選鉱工場が操業していたことが理解できる (*Ibid.* s.60)。浮選とは鉱物表面の疎水性の差を利用した選鉱方法。
  - (24) 1930 年代の語り伝えをスウが書き留め、掲載した雑誌『カイナク』は、バルケスイルの「人民の家」から発刊されていた地方誌である。「人民の家」とは、トルコ革命の一貫としてアタテュルクが推進した、

- 共和人民党の社会・文化事業を推進する下部組織で、この時期、各県ごとにより国民になるための教育の普及や地方史の発掘などの社会・文化運動を展開した。「人民の家」の活動や宣教の内容はどうであれ、地方史の掘り起こしを行い、慣用句、ことわざ、叙事詩・叙情詩、慣習・行事、食文化等を書き留めた各県の地方誌は、史料の性格を考慮すれば、近現代史に不可欠な史料であるといえる。
- (25) 当時のバルケスイルでは、羊一頭が約 220 クルシュである (Gündoğdu 1992 s.43, 118)。
- (26) 1 反は、スリヴェンで 46.75cm × 459 ~ 467.5cm、パザルジュクでは 25.5cm × 1122cm、バルケスイルでは 42.5cm × 646cm というように、地域によって反物の幅および長さが異なっていた (Kütükoğlu 1981 ss.551 - 552)。1 クイイエは、1 オッカ (okka), 約 1283 グラム。
- (27) 西アナトリア諸県の他に、アライエ、アダナ、マラシュ、タルスス、シャルキ・カラヒサル、ドゥルカドル、アンタキヤ、コチヒサル諸郡、さらにはカスタモヌ県スィノブ郡、ハレブ州アンタキヤおよびベイラン郡、スィヴァス県イェニ・イル郡などで、トラキヤ地域ではケシャン、チョルル諸郡にいたことが確認されている (Türkay 2001 s.330; Su 1938 s.120)。
- (28) 同グループ名は、1840 年『資産台帳』(江川 2011) にも、1842 年の同郡周辺に生活する遊牧民の記録 (Akkuş 2001) にも記されていない。
- (29) 当時、バルケスイルは、マニサと合併して一つの県を構成しており、県都がマニサに設置されていたため、通常の郡長を示す「カイマカム」と記されているが、これは正式には県代官、事実上のバルケスイル県知事職を意味する。
- (30) 1 パラは 40 分の 1 クルシュ。
- (31) [Cev. Ask. 5539] (ヒジュラ暦 1259 年 M 月 21 日 /1843 年 2 月 21 日)。
- (32) [Cev. Dah. 9122] (ヒジュラ暦 1260 年 S 月 25 日 /1844 年 3 月 15 日)
- (33) クルドンルについてムタフは、ハレメイン集団 (Haremeyn-i Muhteremeyn Aşireti) とも呼ばれており、夏営地と冬営地とを移動生活するカラケチリ遊牧民に与えられた名である (Mutaf 1995 s.122)、またアイハンは 1826 年にバルケスイルにおいてカラケチリから別れたグループ (Ayhan 1997, s.73) とされているが疑問である。「クルドンル、カラケチリ起源説」の説の典拠を遡ると、どの研究者もスウの文献 (Su 1938 s.40) にいきつく。スウによれば、「1843/44 年に、一部はマニサ県およびブルサ州に」、別の一派は、「アフメト・ヴェフィク・パシヤが視察官の時期 (ママ=筆者注) にバルケスイルから離れて、生活していた諸郡へ併合され、ベイリキの位は廃止させられ、他の住民のように諸措置に従うこととなった」(Su 1938 ss.69-70) という。ただし、テュルクアイは、カラケチリの定住地はアナトリア各地に 25 カ所の地名・郡名が記しており (Türkay 2001 s.408)、クルドンルとカラケチリとは個別に記載しており、両者の関連に関しては一切記していない。『宗務省版イスラーム百科事典』の「カラケチリ」の項目を執筆しているスメルも参考文献にスウの著作を挙げている (Sümer 2001)。このスウが参照している文献は、1903/04 年出版の著者名無記載『カラケチリ遊牧民集団 Karakeçli Aşireti』(ターヒルベイ出版所 (Tahir Bey matbaası) であった。同出版所は、当時の政治・文化を色濃く反映した重要な出版社であるためこの「クルドンル、カラケチリ起源説」は、さらに検証する必要がある。ターヒルベイ出版所については (江川 2015) を参照されたい。
- (34) [Cev. İkt. 499] (ヒジュラ暦 1264 年 B 月 3 日 /1848 年 6 月 5 日) この公文書に関して筆者へ情報をくださった Aydın Ayhan および Ahmet Hezarden 両氏へ感謝いたします。
- (35) [Cev. İkt. 499] この工場開設を推進した人物は、1834 年に現ブルガリアのスリヴェンで最初の織維工場を建設し、操業を組織化した人物として知られるオスマン臣民のドブリ・カルファ (Dobri Kalfa), 別名ドプロ・ジェラスコフ (Dobro Celaskov) であると考えられている (Kütükoğlu 1981 ss.548-549; 1994 ss.639-640)。同時代の官営工場において、フランスなどから機械を導入しようと試みているが、資金調達ができない、あるいは送金中の事故、契約上の問題等によって、計画通りに進展しない例は、イスタンブルに開設されたトルコ帽製造工場 (Feshane) の事例をはじめごく一般に見られる事態だった (Güran 1992 ss.382-383)。
- (36) [A.AMD.51/52] (ヒジュラ暦 1270 年 Za 月 12 日 /1854 年 8 月 6 日)



- (37) [A.MKT.MHM 77/18] (ヒジュラ暦 1272 年 S 月 2 日 /1855 年 10 月 14 日)  
(38) [A.MKT.NZD 162/68] (ヒジュラ暦 1271 年 /1854・55 年)  
(39) [A.MKT.UM 173/72] (ヒジュラ暦 1271 年 Ra 月 7 日 /1854 年 11 月 28 日)  
(40) カフカースとバルカンからのムスリム難民については、秋葉 (2009)。バルケシルに移住したタター  
ルおよびノガイ人の定住に関しては、İlgürel (2011) に詳しい。  
(41) ノガイ人とは、キプチャク汗国の拡大にともなって出現したトルコ系ムスリム集団で、北コーカサス、  
クリミア地域に生活していた。その名は、キプチャク汗国の武将のノガイに由来するといわれているが、  
このことが実証されているわけではない (Alpargu 2010 ss.202-204)。  
(42) [A.MKT.UM.459/99] (ヒジュラ暦 1277 年 S 月 23 日) [A.MKT.MHM.216/38] (ヒジュラ暦 1277 年 L 月  
14 日 /1861 年 4 月)  
(43) 『カレスィ県年鑑』; Eren 1995, s.54; Mutaf 1995, s.170.  
(44) ラヴリオは、現ギリシアのアッティカ地方東南部に位置する港町。古代ギリシア時代にはラウリオン  
と呼ばれ、銀の産地だった。  
(45) バルケシル大地震が発生した年月日については、1897 年 1 月 17 日 (土) 15 時 30 分 (Akpınarlı  
2009, ss.85-86) など諸説あるが、ここではヤズジュの説、1898 年 1 月 29 日 (ヒジュラ暦 1315 年 N 月 6  
日土曜) 15 時 30 分を採用した (Yazıcı 2001)。

主要参考史料 (イスタンブル首相府オスマン古文書館 (BOA) 所蔵)

- [A.AMD. 51/52]  
[A.MKT.MHM. 77/18]  
[A.MKT.MHM. 216/38]  
[A.MKT.NZD. 162/68]  
[A.MKT.UM. 173/72]  
[A.MKT.UM. 459/99]  
[Cev. Ask. 5539]  
[Cev. Dah. 9122]  
[Cev. İkt. 499]  
[ML. VRD. TMT.] 『資産台帳 (Temettüat Defterleri)』 No.7225 (遊牧民), 7226 (遊牧民), 7227 (村民),  
7228 (都市民)

主要参考文献

- 1305 *Karasi Vilâyeti Sâlnamesi* (『カレスィ県年鑑』), Vilayet Matbaası, İstanbul.  
15 *Balıkesir* (共和国建国 15 周年の共和人民党記念誌, 発行年無記載, 1938 年以降)  
Akpınarlı, Kerim Kâni 2009 *Balıkesir Şehir ve Belediye Tarihi*, Balıkesir.  
Akkuş, Tacettin 2001 *Tanzimat Başlarında Balıkesir Kazası (1840-1845) (Demografik Durum)*, Balıkesir.  
Alpargu, Mehmet 2007, "Nogaylar," *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi (DİA)*, Cilt 33, ss.202-204.  
Aslanapa, Oktay 1988 *One Thousand Years of Turkish Carpets*, ed./English text William A. Edmonds,  
İstanbul.  
Ayhan, Aydın 1999 *Balıkesir ve Çevresinde Yörükler, Çepniler ve Muhacirler*, Balıkesir.  
Barkan, Ömer Lütfi 1957 "Essai sur les données statistiques des registers de recensement dans l'Empire  
Ottoman aux Xve et XVIe siècles," *Journal of Economic and Social History of the Orient*, I/1, ss.9-36.  
Bostan, İdris 1992 *Osmanlı Bahriye Teşkilatı XVII. Yüz Yılında Tersane-i Amire*, Ankara.  
Egawa, Hikari 2004 "Balıkesir: A Rural City in Social Economic Change," eds., Hayashi K. & M. Aydın,

pp.107-139.

- Egawa, Hikari & Şahin, İlhan 2007 *Bir Yörük Grubu ve Hayat Tarzı: Yağcı Bedir Yörükleri*, İstanbul.
- Eren, Muharrem 1995 *1305 Karasi Vilâyeti İçin Sâlnamesi*, İstanbul.
- Faroqhi, Suraiya N. 2006 "Declines and revivals in textile production," Suraiya Faroqhi, ed., *The Cambridge History of Turkey vol. 3, The Later Ottoman Empire, 1603-1839*, Cambridge, pp.356-375.
- Genç, Mehmet 1994 Ottoman Industry in the Eighteenth Century: General Framework, Characteristics, and Main Trends, Donald Quataert ed., *Manufacturing in the Ottoman Empire and Turkey, 1500-1950*, Albany, pp.59-86.
- Gündoğdu, Raşit 1992 *Balıkesir Şer'iyeye Sicili (Evâil-i Cemâziye'l-Evvel 1021-25 Safer 1027)(4 Temmuz 1612-21 Şubat 1618)*, T.C. Marmara Üniversitesi Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü Tarih Bölümü Yeniçağ Tarihi Ana Bilim Dalı (Yüksek Lisans Tezi), İstanbul.
- Güran, Tevfik 1992 "Tanzimat Döneminde Devlet Fabrikaları," Hakkı Dursun Yıldız haz., *150. Yılında Tanzimat*, Ankara, ss.235-257.
- Ianeva, Svetla 2014 "Chapter 5 Economic Transformations in the Central Rumelian Lands in the Nineteenth Century: AN OVERVIEW," "Chapter 6 Manifestations and Implications of Early Nineteenth-Century Transformations in the Ottoman Fiscal System in the Central Rumelian Lands," Kate Fleet and Svetla Ianeva eds., *Ottoman Economic Practices in Periods of Transformation: The Cases of Crete and Bulgaria*, Ankara, pp.113-193.
- İlgürel, Mücteba 1992 "Balıkesir," *DİA*, Cilt 5, ss.12-14.
- İlgürel, Mücteba 2011 "Balıkesir'de Tatar ve Nogay İskânı (Tatar and Nogai Settlement in Balıkesir)," *Prof. Dr. Şevki Nezihî Aykut Armağanı*, İstanbul, ss.123-138.
- Kütükoğlu, Mübahat S. 1981 "Asâkir-i Mansûre-i Muhammediyye Kıyâfeti ve Malzemesinin Temini Meselesi," *Doğumunun 100. Yılında Atatürk'e Armağan*, İstanbul, ss.519-605
- Kütükoğlu, Mübahat S. 1983 *Osmanlılarda Narh Müessesesi ve 1640 tarihli Narh Defteri*, İstanbul.
- Kütükoğlu, Mübahat S. 1994 "Osmanlı İktisadi Yapısı," Ekmeleddin İhsanoğlu ed., *Osmanlı Devleti ve Medeniyeti Tarihi, cilt 1 Devlet ve Toplum*, ss.639-650
- Mutaf, Abdülmecit 1995 *Salnâmelerde Karesi Sancağı (1847-1922)*, Balıkesir.
- Özen, Mine Esiner 1982 "Türkçe'de Kumaş Adları," *Tarih Dergisi*, XXXIII, 1980/81 (Ayrı basım), İstanbul.
- Refik, Ahmed 1930 *Anadolu'da Türk Aşiretleri (966-1200)*, İstanbul.
- Quataert, Donald 1983 *Social Disintegration and Popular Resistance in the Ottoman Empire, 1881-1908: Reaction to European Penetration*, New York.
- Quataert, Donald 1990 "The Carpet Makers of Uşak, Anatolia (1860-1914) ," *IIIrd Congress on the Social and Economic History of Turkey (Princeton University 24-26 August 1983)*, İstanbul/Washington/Paris, pp.85-91.
- Quataert, Donald 1992 *Manufacturing and Technology Transfer in the Ottoman Empire 1800-1914*, İstanbul & Strasbourg.
- Quataert, Donald 1993 "The Silk Industry of Bursa: 1880-1914," ; "Machine Breaking and the Changing Carpet Industry of Western Anatolia 1860-1908," *Workers, Peasants and Economic Change in the Ottoman Empire 1730-1914*, İstanbul, pp.97-116; 117-136.
- Quataert, Donald 1994a "The Age of Reforms, 1812-1914," Halil İnalçık & Donald Quataert, eds., *An Economic and Social History of the Ottoman Empire 1300-1914*, Cambridge, pp.759-943.
- Quataert, Donald 1994b "Ottoman Manufacturing in the Nineteenth Century," Donald Quataert ed., *Manufacturing in the Ottoman Empire and Turkey, 1500-1950*, Albany, pp.87-121.
- Sarı, Mehmet & Karaman, Ahmet 1999 *Karasi Meşâhiri İsmail Hakkı (Uzun çarşılı)*, Balıkesir.
- Su, Kamil 1937a "Balıkesirde Eski Tarihlerde Abacılık," *Kaynak*, 50, Balıkesir, ss.33-37.

- Su, Kamil 1937b *XVII ve XVIIIinci Yüzyıllarda Balıkesir Şehir Hayatı*, İstanbul.
- Su, Kamil 1938 *Balıkesir ve Civarında Yürük ve Türkmenler*, İstanbul.
- Sunay, Serap 2007 *II. Abdülhamid Döneminde Balıkesirli Mülki Görevliler Hakkında Bir İnceleme (Sicill-i Ahval Kayıtlarına Göre 1879-1909)*, Afyonkarahisar Kocatepe Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü (Yüksek lisans Tezi), Afyonkarahisar.
- Sümer, Faruk 2001 "Karakeçili," *DİA*, Cilt 24, İstanbul, ss.427-428.
- Şahin, İlhan 2010 "Yörük Kavramı ve Bursa Bölgesi Yörükleri," haz. Yusuf Oğuzoğlu, *Osman Gazi ve Dönemi*, Bursa, ss. 23-31.
- Şimşir, Nahide 2013 *Balıkesir Şehri ve Tarihi Araştırmaları*, İstanbul.
- Türkay, Cevdet 2001 *Başbakanlık Arşivi Belgeleri'ne Göre Osmanlı İmparatorluğu'nda Oymak, Aşiret ve Cemaatlar*, İstanbul (1.baskı 1958).
- Uludağ, Süleyman 1988 "Aba," *DİA*, Cilt 1, İstanbul, ss.4-5.
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı 1925 *Karesi Vilayet Tarihçesi*, İstanbul (İnci baskı 1922/1923).
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı 1992 *Karasi Meşâhiri*, Cilt 3, Mehmet Durak (Sadeleştiren), Balıkesir (1.baskı 1925) .
- Ünlüyol, Aynur 1995 *Şer'iyeye Sicillerine Göre XVIII. Asrın İlk Yarısında Balıkesir (1700-1730)*, Uludağ Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Tarih Anabilim Dalı (Doktora Tezi), Bursa.
- Ünlüyol, Aynur 1998 "XVIII. Yüzyılında Balıkesir'de Kullanılan Giyim Malzemeleri," I. Balıkesir Kültür Araştırmaları Sempozyumu 01-02 Haziran 1998, Balıkesir Üniversitesi Fen-Edebiyat Fakültesi, ss.1-14.
- Yazıcı, Nesimi 2001 "Ocak 1898 Balıkesir Depremi Oluşu ve Sonrası," *Tarih Boyunca Anadolu'da Doğal Afetler ve Deprem Semineri 22-23 Mayıs 2000 Bildiriler*, İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Araştırma Merkezi, İstanbul, ss.151-195.
- 秋葉淳 2005 「近代帝国としてのオスマン帝国—近年の動向から」『歴史学研究』798, pp.22-30.
- 秋葉淳 2009 「68 イェニチェリ軍団の廃止と近代軍の創設（一八二六年）」「77 カフカースとバルカンからオスマン帝国へのムスリム難民の流入（一八五〇—一七〇年代）」『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗』岩波書店, ss.118-119; pp.133-135.
- ゴードン, アンドルー 2013 『ミシンと日本の近代：消費者の創出』みすず書房.
- 江川ひかり 1997 「タンズイマート改革と地方社会：1840年のバルケシル郡『資産台帳』にみる土地「所有」状況を中心に」『東洋学報』79-2, pp.01-029.
- 江川ひかり 2006 「一九世紀オスマン帝国における遊牧民と土地—ヤージュ・ベディルの事例を中心に—」『西南アジア研究』64, pp.35-61.
- 江川ひかり 2009 「一九世紀中葉オスマン帝国における人口と世帯—西北アナトリア, バルケシル郡の事例から」落合恵美子・小島宏・八木透編比較家族史学会監修『歴史人口学と比較家族史』（シリーズ比較家族第III期5）, 早稲田大学出版部, pp.205-234.
- 江川ひかり 2010 「徴税請負制に立ち向かう遊牧民—西北アナトリア, ヤージュ・ベディルの事例から—」『歴史と地理 636: 世界史の研究』224, pp.1-15.
- 江川ひかり 2011 「19世紀中葉西北アナトリア, バルケシル地域における遊牧民の経済状況—1840年『資産台帳』の分析を中心に—」『駿台史学』142, pp.25-57.
- 江川ひかり 2014 「オスマン帝国における遊牧民の墓地と墓標—19・20世紀初頭西北アナトリアにおけるヤージュ・ベディルの事例から—」『明治大学人文科学研究紀要』74, pp.37-72.
- 江川ひかり 2015 「第四章 演劇ポスターに見る社会生活の西洋化」永田雄三・江川ひかり『世紀末イスタンブールの演劇空間—都市社会史の視点から—』白帝社, pp.322-326.
- 大久保桂子 1997 「8 二つの海洋国家—オランダとイギリス」長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之著『世界の歴史 17 ヨーロッパ近世の開花』中央公論社, pp.296-336.
- 川北稔 2003 「第1章 近世社会の成立」「第3章 工業化への道（「コラム アジア物産への憧れが生んだ産

西北アナトリア、バルケスイルにおける<sup>アバ</sup>毛織物製造史序説

- 業革命」を含む)」村岡健次/川北稔編著『イギリス近代史[改訂版]—宗教改革から現代まで—』ミネ  
ルヴァ書房, pp.3-23, 49-74.
- 坂本勉 2015『イスタンブル交易圏とイラン—世界経済における近代中東の交易ネットワーク—』慶應義塾大  
学出版会.
- 澤井一彰 2002「16, 17世紀イスタンブルにおける公定価格制度」『オリエント』, 45-2, pp.75-92.
- 永田雄三 1969「マフムート二世の中央集権化政策の一端—ア—ヤーン, デレベイ対策をめぐって—」『オリ  
エント』12-3/4, pp.149-168, 228.
- 永田雄三 1971「第1章 タンズイマート」『トルコの社会と経済』アジア経済研究所, pp.12-17.
- 永田雄三 1984「歴史上の遊牧民—トルコの場合」永田雄三・松原正毅編『イスラム世界の入びと 3—牧畜民』  
東洋経済新報社, pp.183-214.
- 永田雄三 2009『前近代トルコの地方名士—カラオスマンオウル家の研究—』(明治大学人文科学研究所叢書)  
刀水書房.
- 永田雄三 1998「暮らしのなかのオスマン帝国」永田雄三・羽田正『世界の歴史15 成熟のイスラーム社会』  
中央公論社, pp.17-240.
- 林 佳世子 2008『オスマン帝国500年の平和』(興亡の世界史 第10巻)講談社.
- 福井憲彦 1998「ヨーロッパの世紀」『岩波講座世界歴史18 工業化と国民形成』岩波書店, pp.3-70.

## An Introduction to the Development of *Aba* (wool textile) Industry in Balıkesir, North-Western Anatolia: Evidence from Examining the Economic Activities of Nomads

Hikari EGAWA

Balıkesir, a region in North-Western Anatolia, is famous for its *aba* (wool textile) industry. In the last half of the eighteenth century, the only *esnaf* (guild) of the *Aba* industry was reformed into two *esnafs*; one was both the *aba* cloth makers and the *aba* finishers' (*dinkçi*) *esnaf*, and the other was the *aba* tailors' (*terzi*) *esnaf*. In 1826, with the abolition of the Janissary (*Yeniçeri*) and the subsequent creation of a western-style new army "*Asâkir-i Mansûre-i Muhammediyye*," the *aba* production in Balıkesir became directly involved with the Ottoman Imperial policy, because the new army wore a western-style uniform made of *aba* cloth, designed especially for winter and rain. Therefore, the Balıkesir district became one of the main centres of *aba* production and the *aba* industry in Balıkesir started developing. To make *aba*, a manufacturing process that includes gathering the wool, spinning, weaving, finishing, and sewing is required. As a result, the *aba* industry depended on each aspect of the work being done by the people living in towns and villages, especially nomads who bred sheep. At the outbreak of the Crimean War in 1853, the demand for *Aba*, especially for greatcoats for soldiers to shut out the cold, increased greatly. The administrators of the *aba* industry had begun to be appointed from Istanbul, and not easy to be elected from the regional notables. After the war, Balıkesir was selected as one of the permanent homes for many Muslim refugees from the Crimean region. About thirty years later from the abolition of the Janissary, both the *aba* industry and the Balıkesir region itself were more directly brought both the reformations by the government and the Crimean war. In 1898, the Balıkesir region was struck by a massive earthquake and its economic activities were heavily damaged. However, part of the *aba* industry in Balıkesir continues to this day. It is important to examine the contribution activities of nomads not only to the Ottoman Economy but also to the history of Europe.

**Keywords:** *Aba*, wool textile, Balıkesir, Nomads, Crimean War, the Ottoman Empire.



写真1 長チョッキ（ボタン付）とズボン



写真2 ズボン（後ろ側）



写真3 帽子、長チョッキ（ファスナー付）、ズボン



写真4 バルケシル市内中心部で営業するアバ織物店（2015年2月 筆者撮影）